

〈se rendre + Locatif〉の働き ——事行主体の移動について——

大 竹 眞 加

0. はじめに

フランス語の動詞 *rendre* に *se* を添えて 〈*se rendre + Locatif*〉という表現形式を用いると、(1) や (2) のように「事行主体の移動」を表すことができる。

- (1) Je devais **me rendre** tous les jours de la semaine du côté du bois de Boulogne chez des gens riches dont je gardais la petite fille.

(MODIANO Patrick, *La Petite Bijou*, 2001)

- (2) Je **me rends** sur cette tombe une fois par an environ.

移動先は、(1) のように話し手が発話時点にはいない場所のこともあれば、(2) のように話し手がいなくてまたはいるところのこともある。また、次の (3) b. はインフォーマントによると容認可能ではあるが、一般には (3) a. の方がよく使用される。

- (3) a. Je vais au cinéma.
b. Je **me rends** au cinéma.

このように 〈*se rendre + Locatif*〉は、確かに事行主体の移動を表すが、(1), (2) でみたように移動先についての制約が緩いことや (3) b. が容認されにくいことなどから、*aller* または *venir* と働きが同じであるとは考えられない。

事行主体の移動 〈*se rendre + Locatif*〉に関する先行研究は非常に少ないが、本稿ではまず 1 章で Franckel (1989, 1990) による分析を概観し、2 章の用例分析と 3 章の 〈*se rendre + Locatif*〉を用いる際の事態の心理的な捉え方に基づ

き, *aller*, *venir* との意味表現効果の差異を明らかにする⁽¹⁾。なお, 事行主体を X, 事行対象を Y, Locatif を Z とする。

1. 先行研究

Franckel (1989, 1990) は, 用例観察の結果 *rendre* と 〈*se rendre*〉の基本的な働きを次のように記述している。

Rendre は, Y と Z の関係づけを時間軸上に位置づけること (*ancrage dans le temps*) を通して, Y の性質 (*propriété*) の顕在化 (*centrage*) を行う⁽²⁾。

また, 事行主体の移動については (4) の例をあげ, 次のように分析している。

(4) Je **me rends** à la manif.

話し手は, la manif を Y (=X) がいるべき場所と捉えており, Y にはそういう特性がある, とされる。その特性は, je と Z との関係づけの操作が行われる, つまり je が実際に la manif に移動することでしか顕在化しない。また, 到達点に関しては, 事行主体 (je) が位置すべき場, または Y がなんらかの意味で呼び出しを受けたような場として捉えられる。そのため, *chez soi* や *chez toi* よりも仕事場のような場所への移動が表されることになるようだ。ところが, 文の構造上それら前置詞句が容認される場合があり, それはアオリスト的, 総称的価値を同時に構文に与える *quand* のような時間的位置づけをおこなうマーカーが 〈*se rendre* + Locatif〉よりも前にある (5) のような場合である。

(5) Quand je **me rends** chez toi, je mets toujours un nœud papillon.

さらに, Franckel (1989, 1990) は, 〈*se rendre* + Locatif〉を *en train de* の形で用いることは難しいということも述べている。

このような指摘がある一方, フランス語の基本的な移動動詞である *aller*, *venir* との差異は明らかにされていない。次の 2 章からは 〈*se rendre* + Locatif〉が用いられるコンテキストを分析し, 必要に応じて *aller*, *venir* と比較しながら

ら 〈se rendre + Locatif〉を用いる際の制約を明らかにする。

2. 発話例の分析

2.1 Z への然るべき移動

〈se rendre + Locatif〉は、話し手の位置や運動の方向は動詞 *aller* に見られるものと同じであり、(1) のように話し手が発話時点にいない場所へ事行主体が移動する場合にも用いられる。ところが、発話状況で Z が明確に分かっていない (6) のような場合、*aller* を用いる (6) a. の発話は容認されるが、(6) b. の発話は不適格とみなされる。

(6) a. Tu vas où?

b.*Tu **te rends** où?

また、インフォーマントによれば、次の (7) a. と (7) b. の違いは映画館 (Z) が事行主体 (Y) の職場であれば (7) b. の方がより自然な発話として容認されることにある、という。

(7) = (3) a. Je vais au cinéma.

b. Je **me rends** au cinéma.

仮に Y (=X) が Z で働いているという状況があるとする、Y には従業員として Z でなすべきことがあると想像できる。つまり、Z で Y がなすべきことをするために移動が必要であることになる。

また、Y が Z に移動しなければならない状況下にあることが聞き手にとって明らかである方が、そうでない場合よりも 〈se rendre + Locatif〉が容認されやすいようである。

(8) Qu'est-ce que tu fais là?

a.? Je **me rends** à la manif.

b. Tu vois, je **me rends** à la manif.

(8) b. では «Tu vois» という間投詞が入っているため、例えば次のような場面を想定することができる。Y がそのデモに参加する理由を聞き手が知ってい

るはずで、そのことを思い出させようとしている状況である。または、Y は頻繁にデモに参加する人物で、そのことが話し手と聞き手の間で了解済みであり、聞き手にそのことを想起させようとしている。もしくは話し手の姿に対する注意を喚起し、そのデモに必要な装いをしていることから話し手自身が Z にいることが当然の存在であるということを聞き手に示そうとしている。これに対して、(8) a. では、Y が Z へ移動すべきであるということを聞き手が了解しないままになる恐れがあると考えられる。

このように、実例を観察すると〈se rendre + Locatif〉が用いられる場合、Y が移動することに加えて、Y に「～として」なすべき役割や義務が課されている、もしくは Y 自身が自らのすべき事を課している状況があることがわかる。

2.1.1 Z への公的な移動

Y の Z への移動が公的なものである場合というのは、主に Y の職務や社会的立場が関与する移動である。

- (9) La chancelière allemande Angela Merkel et le président français François Hollande **se rendront** à Reims le dimanche 8 juillet pour célébrer cinquante ans d'amitié franco-allemande.

X=Y:「公人として」

(9) では、Y (=X) は首相または大統領であり、その役職にある人物としてドイツとフランスとの 50 年の友好関係を祝うための職務を果たす目的で移動することが述べられている。また、(10)、(11)においても Y の肩書に付随して発生している義務や任務を達成する移動が述べられている。

- (10) Le conseiller spécial du représentant de l'ONU pour les enfants et les conflits armés, Allan Rock, avait aussi expliqué que des soldats **se rendaient** dans des villages tamouls pour y photographier des enfants qui étaient ensuite enrôlés de force. (*Libération*, 9 avril 2007)

X=Y:「兵士として」

- (11) Trente rédacteurs en chef, convoqués lundi 21 février pour se justifier de propos racistes publiés dans leurs journaux, ont décidé de refuser de **se rendre** aux convocations. (*Le Monde*, 25 février 2000)

X=Y:「雑誌の編集長として」

一般に aller と共起する“en vacances”であっても、「大統領としての」公的な移動と捉えられると, aller よりも 〈se rendre + Locatif〉で表される傾向があるようだ。

- (12) *Jacques Chirac se rendra* sur l'île de la Réunion pour des vacances d'une dizaine de jours à l'issue de sa visite à Madagascar, le 27 juillet, a indiqué, vendredi, le service de presse de l'Elysée. (*Le Monde*, 26 juillet 2004)

- (13)*Nous **nous sommes rendus** à Kanazawa pendant les vacances d'été.

フランスにおいて, 国家元首がバカンスを過ごす場所やその過ごし方は, 国民にとって重要と見なされマスメディアでも取り上げられる話題である。普通ならば Y と Z の間に職務が関与しないはずのバカンスの話題でさえ, (12) のような場合, Y の職務を喚起し 〈se rendre + Locatif〉が用いられると考えられる。反対に, Y が私人として (たとえば観光客として) 移動することを表す場合には (13) のような 〈se rendre + Locatif〉を使う発話は容認されにくい。

このように, 新聞など公共性をもつメディアの文体では, ローマ法王, 大統領, 政治家, 兵士など, 公人や社会的地位の高い人物の移動については aller よりも 〈se rendre + Locatif〉が使用されることが極めて多い⁽³⁾。また, 小説では, 会話文よりも地の文で 〈se rendre + Locatif〉が用いられる頻度がより高いようである。このようなことから, aller に比べて格調高い表現であると考えられるかもしれない。

2.1.2 Z への私的な移動

Y の社会的立場や肩書がはっきりし, Z への移動が公的なもの場合には, Y が Z で果たすべき事は明確であるが, 実際には Y の移動が私的であっても 〈se rendre + Locatif〉は用いられる。

- (14) (戦争の被害から逃れるため長い間疎開していた主人公が、自宅の部屋に入る場面)

Je **me suis** directement **rendue** dans le salon. Il y avait toujours ce canapé sur lequel mes parents m'annoncèrent autrefois qu'ils m'envoyaient en Autriche. (SATRAPI Marjane, *Persepolis*, 2000)

X=Y:「部屋の所有者である家族の一員として」

- (14) では、Y には、疎開先から自宅に戻ってきたときに Z を一番初めに見たいという気持ちがあり、Y は Z に行くことを自分の課題として考えていたと捉えられる。

- (15) Deux jours plus tard, le grand-père Dussault meurt, victime d'une ultime crise d'asthme.

Geneviève et Marie-Thérèse **se rendent** avec leur mère à Paris pour s'acheter des chapeaux en vue de l'enterrement.

(WINOCK Michel, *Jeanne et les siens*, 2003)

X=Y:「葬式をする者として」

- (14), (15) においても、Y が自分自身に対して Z でなすべき事を課していて、そのために Z への移動が必要であると思われる場面が描写されている。いずれにせよ、Y が自分自身でなすべき事と思っている事態を達成するには、Z への移動は当然である。

Y の移動が然るべきものであると思われる状況の中には、その事態の生起が Y にとって習慣化している場合もある。次の (16), (17) がその例である。

- (16) On **se rendit** à la messe et au cimetière, avec tante Madeleine, *comme d'habitude*, mais on resta moins longtemps devant les tombes.

(TROYAT Henri, *Viou*, 1980)

X=Y:「教会や墓地に行く信者として」

- (17) Les tamaris verts, avec leur feuillage de voilage. Les gens marchent. Leur groupe aussi, qui **se rend** à la cantine, au moins une heure plus tard que *d'habitude*. (SCHREIBER Boris, *Un silence d'environ une demi-heure*, 1996)

X=Y:「学生として」

このように、Y が Z において「～として」なすべき事の中には、社会的・公的な事柄だけではなく、個人的・私的なものもあるが、いずれにおいてもそれは Y が Z に移動することが当然であるように感じさせる特性が顕在化する行為であると考えられる。

2.2 移動の様態補語との共起

動作の遂行に言及する様態補語のうち、移動の方法や様態を表す前置詞句、副詞句などは *aller* とともに問題なく用いられる。しかし、〈se rendre + Locatif〉は、移動の方法に関する表現とは問題なく共起するが、移動の様態を表す補語とは共起しにくい。

(18) Parfois, les joueurs **se rendaient** *en voiture* à Bordeaux, Lille ou Paris pour des exhibitions. (*Le Monde*, 5 décembre 1997)

(19) Terra **se rendit** *lentement* au fauteuil en s'appuyant sur sa canne. Le directeur, maintenant informé de la condition physique de Terra, lui laissa le temps de s'installer. (ROBILLARD Anne, *Qui est Terra Wilder?*, 2006)

移動の様態の表現と共起する実例は、筆者のコーパスからは 3 件しか出てこなかった。そのうち 1 件の事行主体は、(20) のように人ではなく事物である。

(20) Je connais ces bêtes et je peux te dire qu'une seule de leurs morsures plonge la victime dans un coma profond. Ensuite, le poison **se rend** *lentement* au cœur et bloque toutes les artères.

(PERRO Bryan, *Amos Daragon I*, 2009)

また、*doucement*, *à grand pas*, *à pas précipité*, *d'un pas vif* などそのほかの移動の様態を表す副詞句と共起する例は見られなかった⁽⁴⁾。

このように、移動の様態との共起が難しいことから、〈se rendre + Locatif〉が表す行為は、移動自体に焦点があるとは考えにくい。むしろ 2.1 でみたように、Y の Z への移動が然るべきものと思われること、Y がもつ責任を果たすことや役割が発揮されることが重要であるようだ。

2.3 〈se rendre + Locatif〉の表現効果

「Zに移動しなければならない」というYの置かれる義務的な状況は、Yの肩書が原因であるときや、Yの目的が原因であるときなど様々なことが想定できる。例えば、そのような義務的な状況に対してYがマイナスの感情をもっていることが明確であるとき、〈se rendre + Locatif〉を用いると、allerでは十分にあげることのできない表現効果として皮肉を感じさせることがある。

- (21) (ディズニーランドがあまり好きではないが自分の子どもに連れて行かされた人物による発話)

Je **me suis rendu** deux fois à Disneyland.

- (22) (田舎が苦手な話し手が田舎に家を構える兄弟の家に滞在するよう提案されて)

Pourquoi je **me rendrais** chez toi et passerais tout un week-end à la campagne?

(21) は、ディズニーランドがあまり好きではない話し手が、その事をよく知る聞き手に向けた発話である。話し手は、自分の子どもにディズニーランドに連れて行くことをせがまれ、父親としての務めを果たすためにZへ移動したことを述べている。しかし、この場合は、話し手がその移動を肯定的に捉えていないということが明白であるため、皮肉の表現効果が生じると考えられる。(22)でも同様に、話し手は事態の成立を好ましくは思っていないと示されている。いずれの場合も、話し手は事態の成立に対して否定的な感情を抱いていることがはっきりしており、かつYとZの義務的な関係が事行主体によってつくられるのではなく別の誰かによるものであるとき、皮肉の表現効果が出ると考えられる。

3. 事態の捉え方

主体移動動詞 aller, venir に関する先行研究では、話し手と聞き手の位置や

移動の方向という観点からそれぞれの動詞の違いが明らかにされている⁽⁵⁾。同様に、泉（1978）や安生（1990）は、(23) のような「話し手または聞き手にとって本拠となる場所への移動」や、(24) のような「直接的接触目的」という話し手の心理が動詞の選択の要因となる場合もあると述べている。

(23) Je viendrai chez vous demain à moins que je change d'idée. (in 泉)

(24) (au café) J'irai à la bibliothèque demain ;

a) est-ce que tu [iras, *viendras] aussi?

b) est-ce que tu [*iras, viendras] aussi pour travailler avec nous?

(in 安生)

また、阿部（2012）は次のような興味深い指摘をしている。

「原則として「くる」と venir は発話者に近づくこと、日本語の「いく」とフランス語の aller は発話者から遠ざかることを表すが、これは移動が発話者を基準点としてとらえられているということであり、発話者は当該事態をそれが起こっている時空間の外側からではなく、内側から描写しているということになる。」

阿部（2012）は、発話者を「語り」において基準点の役割を果たすものとして定義するが⁽⁶⁾、発話者の事態の描写の仕方についてはこれ以上詳しく言及していない。しかしながら、主体移動動詞の選択には、この観点も確認しておく必要があるそうである。なぜなら、次の(25)は1章で述べたように「然るべき移動」という条件が整っているにもかかわらず、容認不可であり、その理由の一つとしてかかわるからである。

(25) (病気の友人から急いで自宅に来てほしいという依頼の電話に対する応答⁽⁷⁾)

a.* Je **me rends** tout de suite chez toi.

b.* Je vais **me rendre** tout de suite chez toi⁽⁸⁾.

実は、阿部（2012）が述べている事態を内側または外側から捉えるという考えは、これまで認知言語学の研究で指摘されてきた視点や主観性の問題にかかわるものである。例えば、中村（2004, 2009）は、認知言語学の分野で述べら

れてきた、認知意味論⁽⁹⁾、文法・認知統語論⁽¹⁰⁾、主観的意味解釈⁽¹¹⁾という三つの側面を統合する認知モデル⁽¹²⁾をもとに、D モード・I モードという独自の二種類の認知モードを提案している。中村によると、人間の基本的な対象の認知の仕方は、認知主体と何らかの対象（や環境）との身体的インタラクションに基づいて認知像が形成されるという状況密着型であり、それを I モード（Interaction mode of cognition）と呼んでいる。例えば、物が「重い」「軽い」という判断は、対象を持ち上げるという身体的インタラクションが関与し、認知主体の体力や身体的コンディションに影響され、「重い」「軽い」は客観ではないと述べられている。要するに、I モードとは話し手が事態をその状況内で認知しているということである。

また、中村（2004, 2009）は、I モードが本来の人間の認知のあり方であるが、その主観的な認知像や印象をあたかも客観的であるかのように思い込む性向があると指摘し、そのような外置の認知モードを D モード（Displaced mode of cognition）と呼んでいる。D モードの特徴は、認知主体がインタラクティブな認知の場の外に出て、あたかも外から眺める視点をとる過程⁽¹³⁾にあるとしている。D モードとは事態をその状況の外から認知することであり、いわば幻想モードである。

フランス語の事象を認知言語学の特定の理論を援用して本格的に考察することが本稿の目的ではないので、ここでは I モードと D モードという事態の捉え方を紹介するに留めておく。

さて、先に述べたように現在形と近接未来形が用いられている（25）は不適格な文である。しかし、（26）のように発話時点と行為の現場を切り離すと容認されやすくなるようである。

（26）（（25）の出来事を第三者に向かって説明するとき） Elle m'a téléphoné
en me disant qu'elle avait mal au coeur et je **me suis** tout de suite **rendu**
chez elle.

（25）と（26）では、Y, Z、話し手の位置や運動の方向は同じである。それにもかかわらず、（25）と（26）で容認度に差が現れる要因の一つとして、認知

モードの違いがあげられる⁽¹⁴⁾。(25)と(26)とでは、使用されている時制が異なり、話し手の事態の捉え方が異なっていることがわかる。(25)では、話し手の位置と聞き手がいる所までの距離といった(中村(2004, 2009)の用語を用いるとするならば)身体的なインタラクションがあり、事態をIモードで捉えているといえる。しかし、(26)では、複合過去形で事態から距離を置き、話し手はDモードで事態を捉えていると考えられる。

〈se rendre + Locatif〉は、(27) – (29)のように venir の意味解釈ができるコンテキストでも用いられることがあるが、それが可能になるのは〈se rendre + Locatif〉が、話し手が事態と距離を置いてDモード認知で述べる表現であるからではないか。

(27) = (2) Je **me rends** sur cette tombe une fois par an environ.

(28) Je ne peux pas vous dire à quel point nous sommes reconnaissants de vous accueillir ici, et d'ailleurs je trouve remarquable que vos gouvernements respectifs vous aient permis de **vous rendre ici** (. . .) Nous en sommes franchement très flattés. (*Le Monde*, 1 avril 2000)

(29) J'ai voulu **me rendre** personnellement, *ici*, à Kinshasa au sommet de la Francophonie. D'abord pour une raison simple. C'est que je voulais témoigner du soutien de la France au peuple congolais qui aspire comme chaque peuple à la paix, à la sécurité, à la démocratie.

(*Europe 1*, 12 octobre 2012)

動詞 venir は、発話時点の話し手や聞き手の位置などの身体的インタラクションを通して認知像が構築されるので、明らかにIモード認知を反映する動詞であるといえる。また、動詞 aller は、Iモード認知に加え、(30)のようにDモードの認知も反映される動詞であると考えられる。

(30) La cuisine, Didier n'en fait pas une affaire. «C'est pas comme la vie, où, là, il n'y a pas de recette», lâche-t-il en riant de lui-même. Pour son plat préféré, il faut quand même que quatre conditions soient réunies. Une, que ses enfants soient là. Eloïse, l'aînée, fait ses études à Montpellier ; Victor,

le second, est en fac à Lyon et Sarah, la dernière, va au lycée à Tarare, «difficile à coordonner». (*Le Monde*, 9 avril 2004)

このように、〈se rendre + Locatif〉は、認知のモードの観点からも動詞 *aller* と *venir* とは異なっており、D モード認知を反映する表現である。発話時点と行為の現場を切り離すと〈se rendre + Locatif〉が用いられやすくなるのは、事態を客観的にその状況の外側から捉えると Y にある Z への移動の必然性の顕在化が認識されやすくなるからであろう。

4. まとめ

〈se rendre + Locatif〉は、主体移動を表す *aller* と *venir* と同じような意味をもつが、大きく異なる点が二つ明らかになった。一点目は、〈se rendre + Locatif〉の場合、Y の移動によって、Y がもつ義務や任務が顕在化することが話し手の意識の中心にあるということである。つまり、移動は Y にとって必然という性格をもつものである。それに対して、*aller* と *venir* の場合は移動が Y にかかわるそのような性格をもつものでなくても問題ない。二点目は、〈se rendre + Locatif〉が、あたかもその状況の外側から事態を眺めているような認知モードの表現であるということである。行為を捉える話し手の基準点が、事行主体や Z にあるわけではないために、*aller* だけではなく *venir* の意味でも用いられることが可能であるようだ。しかし、*venir* は〈se rendre + Locatif〉と対極にあり、原則として I モードの認知を反映する。また、*aller* は、I モードと D モードの両方のモードで事態を捉える場合があるので、*venir* と〈se rendre + Locatif〉の中間的な動詞であるといえる。

〈se rendre + Locatif〉は、Y がもつ義務や役割など Y が Z にいることが当然であるという情報が顕在化するような仕方の移動を表す表現形式であるといえる。

注

- (1) コーパスには、映画、演劇のシナリオ、小説、新聞記事を使用しており、出典の記載がない用例はインフォーマント一名の協力を得て作成したものである。
- (2) 次の文は、Franckel (1989) からの引用であるが、Franckel が用いている X, Y は、それぞれ筆者が用いている Y, Z である。“J’ai constitué la manif comme pôle de centrage qualifié de la propriété être là où je suis. Une propriété de X (je) non centrée en tant que non relativisée et référée seulement à X se centre à travers l’actualisation de la mise en relation de X avec Y (la manif) qui prend le statut de lieu de référence, lieu de destination.”
- (3) 基本的に、新聞などのメディアの文体で首相や大統領の移動を *aller* で表すことは不自然であるようだが、用例が全くないわけではない。次の例は、Y が公人として Z においてする事があるという内容の文だが、*aller* が用いられている。(Pour la seconde fois depuis le début du conflit au Kosovo, le premier ministre, Lionel Jospin, est allé au Sénat, jeudi 29 avril, pour faire le point sur la situation. (Le Monde, 3 mai 1999)) 動詞 *aller* を〈se rendre〉に置き換えられるが、書き手は意図的に Y に備わる義務を打ち出さず、あえて X の移動だけを述べる場合もあるようである。
- (4) ただし、インフォーマントによると *vite* との共起は容認可能であるという。しかしそのような場合、移動行為そのものの速さではなく、「ただちに」という意味で捉えられてしまう。(Il s’est vite rendu au poste de police pour signaler l’accident.)
- (5) 泉 (1978) は、日本語の「行く」が、ある地点を離れることだけに着目することができるのに対して、フランス語の *aller* は到達点に向かうことに着目する動詞であると考えている。また、安生 (1990) は、*aller* と *venir* のあいだの選択が、発話時点及び事行主体の到着時における話し手と聞き手と事行主体の位置関係によって決まるということや、*venir* が日本語の「行く」の意味をもっているということなどそれまでの *aller* と *venir* の先行研究で示されていたことには該当しない、*aller* と *venir* のどちらでも用いることができる場合の差異の解明を試みている。
- (6) 「語り」においては、作者たる「発話者」とはまた別に疑似主体としての「語り手」が潜在し、これが基準点として機能すると定義されている。
- (7) “J’arrive.” や “Je vais venir” といった返答も考えられるが、ここでは〈se rendre〉を用いた場合を検討している。
- (8) (25) a., (25) b. は *il faut que* などのモダリティ表現と共起する場合には、容認されるようになる。
- (9) 人間の世界観やカテゴリー化が私たちの身体性や私たちと環境との直接的なインタラクションに根ざすという経験主義的な理論のこと。中村 (2004) は Lakoff

(1987), Johnson (1987) を参照している。

- (10) 言語構造や文法構造が、人間のもつ一般的な認知能力や認知プロセス、とりわけ際立ちの認識や注目のあり方の反映であるとする理論のこと。中村 (2004) は Langacker (1987, 1991), Deane (1992) を参照している。
- (11) 意味変化や主体化における主観性に言及するとき、その主観性はテキストに加える解釈が主観的ということであり、それゆえ解釈が定着していく際にみられる意味の展開も主観的ということになるという理論のこと。中村 (2004) は Traugott (1988, 1995) を参照している。
- (12) ①私たちの身体を使って対象と直接インタラクトしながら、②私たちのもっている一般的な認知能力や認知プロセスを通して、③さまざまな認知像を形成し経験している、この三つの側面のうちどの側面を欠いても、十全な認知モデルは成立しない。中村 (2004) では、「太陽は東から昇る」という現象を例にあげ、この現象は客観的な事態と錯覚しがちだが、実のところはこの三つの側面をもつ認知モデルを通して得られる認知像に他ならないと述べている。
- (13) 中村 (2004, 2009) は、これを脱主体化 (desubjectification) と呼んでいる。
- (14) (25) が不適格になる要因は、もう一点考えられる。すでに 2 章でみたように、〈se rendre + Locatif〉は、Y のただの移動ではなく、Y の義務や責務が顕在化する移動を示すようだ。(25) のような状況においては、義務的な性格を帯びた移動であることをわざわざ聞き手に感じさせる発話することは不自然に思われるため、不適格な文になると考えられる。ただし、重要な会議が開催されている最中に出席者の一人である重役が社外にいる部下に会議室にかけつけるように電話で指示した場面では、部下が «Entendu, monsieur le directeur, je me rends tout de suite à la réunion.» というのは不自然ではないと考えられる。

参考文献

- FRANKEL, J.-J (1989), *Etude de quelques marqueurs aspectuels du français*, Librairie Droz : 245–254. (1990), *Les figures du sujet : à propos des verbes de perception, sentiment, connaissance*, Ophrys : 179–201.
- 阿部宏 (2012), 「空間移動表現の意味拡張について「くる」と venir の場合」, 『川口順二教授退任記念論集』.
- 安生恭子 (1990), 「ALLER と VENIR の意味構造 : VENIR の拡大的用法を中心として」『フランス語学研究』日本フランス語学会, 24 : 14–27.
- 井口孝子 (1998), 「フランス語の再帰的代名動詞と中立的代名動詞」『ステラ』第 1 号 : 49–64 九州大学フランス語フランス文学研究会.
- 泉邦寿 (1978), 『フランス語を考える 20 章－意味の世界－』白水社.
- 久野璋 (1978), 『談話の文法』, 大修館書店.

- 田辺貞之助（1983），『現代フランス文法』白水社.
- 中村芳久（2004），『認知文法論Ⅱ』大修館書店.（2009），「認知モードの射程」『「内」と「外」の言語学』，開拓社：353–393.
- 春木仁孝（2012），「フランス語における事態の認知方策について」『言語文化研究』，38：45–65.
- Französisches Verblexikon*（1977），Stuttgart：Klett-Cotta.
- Dictionnaire alphabétique et analogique de la langue française*（1985），Paris, Le Robert.
- Dictionnaire de la langue française：lexis*（2001），Paris, Larousse.
- Le Grand Robert de la langue française*（1991），Paris, Le Robert.
- Trésor de la langue Française*（1990），Gallimard.
- 『小学館ロベール仏和大辞典』（1988），小学館.
- 『フランス語学小事典』（2011），駿河台出版社.
- 『ラールス仏和辞典』（2001），白水社.
- 『ロベール・クレ仏和辞典』（2011），駿河台出版社.

（文学研究科修士課程修了）